

目次

源氏積 (時雨亭文庫本)	5
源氏積 (九曜文庫本)	81
奥入 (大橋家本)	89
光源氏物語抄 (黒川文庫本)	145

などはなくてそとはかゝればにやといふは

ある時はありのすさみにゝくかりきなくて

そ人は恋しかりける

御かと野わきしてものこゝろほそきたくれ

ゆけいの命婦をみやすところのはゝのもとへつ

かはしてはかなき御あそひにもことにふれ

てはへくしく人にはまさりし御けはひかた

のおもかけにたゝせ給やみのうつゝにはなを

をとりけりとあるところ

むはたまのやみのうつゝはさやかなる

ゆめにいくちもまさらさりけり

命婦かしこにいきてかどひきいるゝ程にくさ

もしけく〇あれたるを月のかけはかりそや

えむくらにもさはらすさし入たるとあるは

やえむくらしけるやとのさひしさに

人こそみえねあきはきにけり

露ふきむすふとよみてつかはしたるに更

衣の母えみはて給はていのちなかさのいと

つらくおもひ給へらるゝにまつと思はんことさ

へはつかしくとあるは

いかにしてありとしられたかかさこのまつ

の思はんこともはつかし

御息所のはゝ命婦にあひてこゝろのやみに

なといふは

人のをやのこゝろはやみにあらねとも

こそおもふみちにまとひぬるかな

御息所のはゝ命婦のをくり物にかの御かたみ

のさうそくひとくたりをし給つるをやかてう

に御らんせさするになき人たつねみえたるしる

しのかんさしならばとてたまの行系おと

よまれたると又あさゆふのことくさにはね

をならへえたたをかはさんと契しらせ給とあ

るは

件の玄宗なけきかなしみ給に方士といふ

人きたりて貴妃のおほし所をたつねん

といひて雲にのほり地にいりてみれともあ

はずはかへらさるに蓬菜にゆきてあひ

たてまつりぬ 玄宗にこのよし申さん

さらにしんせられししるしを給はらんと

いふにたまのかんさしをとりてこれを

まいらせたらはしんせられなんといふにかん

さはよにある物なり しるしとするに

たらず 人にしらせすしてともにの給へる

ことやあるといふに貴妃むかし七月七日長生

殿にして天にあらはねかほくははねをなら

ふるとりとならん 地にあらはねかほくは枝

をつらぬる木とならんと契給へりきといふ

これを方士かへりまいりていかてすむらんあ

さちふのやとゝよみて

このころ亭子のみかとの御てつからかき給て

伊勢と貫之とに山とこととはつけさせ給へる

長恨哥の御系御らんしつゝともし火を

かきあげつくしておはしますといふは

夕殿 螢 飛 思 悄 然 秋 燈 挑 盡 未 能 眠

といふ長恨哥の文也 これは恋のこゝろ也 こ

の系つかさのとのみ申のこ系きこゆるは

うしになるへし 人めをおほしてよるの

「四ウ

をどゝにいらせ給ても露まどろまれたまふ

ことなし あしたにおきさせ給てあくるも

しらすとあるは

たますたれあくるもしらすねしものを

ゆめにみえずとなけきつるかな

源氏のわらはにてこまのくにの人にみえ給所

に宇多院の御いさめありけりといふは寛平

の遺誠にみかとは異國の人にはみえ給まし

とあるところとなり

二 はゝき木

さるはいといたふよをまめたち給ける程

かたのゝ少将とわらははれ給けんかしといふは

たつぬへし

あまひのう系の御もととなり

おほいどのにたえくまかりいて給 しのふの

みたれやとうたかいきこゆるところ

むさしのゝわかむらさきのすりころも

しのふのみたれかきりしられす

あまよのしなさためるところにせはきい

「五オ